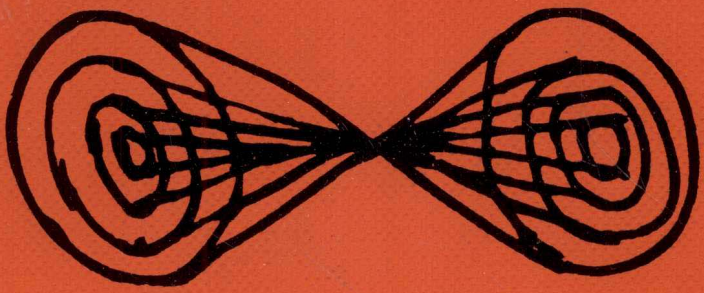

古典劇集

フォースタス博士の悲劇　ヴォルポーネ
疑わしい真実　ル・シッド　タルチュフ
孤客　フェードル　賢人ナータン

平井正穂・三神勲・会田由・秋山晴夫・
鈴木力衛・辰野隆・二宮フサ・浅井真男訳

世界文學大系

14

筑摩書房版

世界文学大系 *14*

古典劇集

辰野

昭和36年10月30日発行

定価500円

訳者代表　辰野　隆
発行者　古田　晁
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768　電話 (291)局 7651

目次

マーロウ
フォースタス博士の悲劇　平井正穂訳　5
ジョンソン
ヴォルポーネ　三神勲訳　53
アラルコン
疑わしい真実　会田由訳　121
コルネイユ
ル・シッド　秋山晴夫訳　173
モリエール
タルチュフ　鈴木力衛訳　207
孤客　辰野隆訳　244

ラシーヌ　二宮フサ訳　279
フェードル
レッシング　浅井真男訳　325
賢人ナータン
解説　小場瀬卓三　401
古典演劇史年表　413

装幀　庫田　叡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マーロウ

エリザベス朝後期の絢爛たる文学の中心部に偉大なシェイクスピアが存在していたことはいうまでもない。この処女王朝の初めの数十年間におけるさまざまな、形而上的・形而下的な各分野でのエネルギーの蓄積が最後の十数年の間で核爆発にも似た恐るべき、また驚嘆すべき様相を呈したと、文学史的には考えられよう。シェイクスピアはけっして単なる「天才」としてかたづけられない。彼を一つの全体として、一つのパタンとして見るとき、その背後にはヨーロッパ的な規模で凄絶な展開をそれまでに示してきたあらゆる思潮が流動していることがわかる。それらの思潮の中ではわれわれの視角からみるとはなはだしく異質的で互いに距離があると見える多くの問題が複雑にしかも深く絡みあって存在していた。信仰上のドグマの問題は政治的信念の問題とは離すことはできなかった。そういう人間についての省察への長い期間にわたる沈潜が急激な躍動に転じ、それを舞台上に視覚化し柔軟で深みのある無韻詩形で聴覚化したのがシェイクスピアを中心とするエリザベス朝演劇であった。

シェイクスピアという巨大な存在を可能ならしめた多くの作家のうち、いわば彼のもっとも直接的な先駆をなした者にクリストファ・マーロウがいた。といっても年代的には一五六四年二月の生れであるからシェイクスピアより僅か二月しか早いにすぎないのだが、さまざまな面から単に同時代人というより先駆であったということができる。シェイクスピアはアカデミックな教育をうけておらず、彼の厖大な教養はいわば皮膚を通じ感覚を通じ魂を通じて血肉化されたものであったが、そのような教養を一つの雰囲気として醸成するのに大きな貢献をしたのが当時の「大学才子」たちであり、その中心がマーロウであった。中世的なスコラ的な世界観・精神構造がルネサンスや宗教改革の衝撃をうけつつ近代へと変貌しようとする際、その思想的なるつぼはいうまでもなく大学であった。特にマーロウが出たケインブリジの人々がプラトンを愛し、マキャヴェリを重視していたことは大きな意味をもっている。マーロウは当時の知識人の中に瀰漫していたルネサンス・ヒューマニズムをそのもっとも尖端的な、またラディカルなかたちで吸収し、これを劇化した詩人であった。スコラ的な世界観のもつ階層性の意識、神の秩序と人間の秩序との限界の意識に真向から挑戦し、人間的なものの昂揚を大胆に主張した詩人であった。比喩を用いていえば、羽を蠟でつけて太陽を目がけて飛翔したイカルスの自負があった。しかしまた、同時にマーロウが知っていたことは、太陽に近づいたためその蠟がとけ、イカルスは転落の悲運をみずから招いたことでもあった。この「イカルス・コンプレックス」とでも称すべき意識がマーロウの作品の基調なのだ。無限の権力への意志を示す主人公を描いた『帖木児大帝』(一五八七年頃初演)の中にも、無限の富を追求するユダヤ人を描いた『マルタ島のユダヤ人』(一五九〇年初演)の中にも、無限の知識を追求した学者を描いた『フォースタス博士の悲劇』(一五九二年頃初演)の中にも、人間的ないとなみの儚さ、無常感がなんらかのかたちでどこかにある。『マルタ島のユダヤ人』のプロローグの中でマキャヴェリが自ら登場していう「宗教がなんだ、子供だましの玩具ではないか。無知のほかこの世に罪があってたまるものか」という言葉は、読者の耳にこびりついて離れない。マーロウが無神論者のグループに属しており、キリストは要するに私生児であったと放言したり、枢密院に喚問されたり、その喚問の約十日後居酒屋で殺された(一五九三年五月)ことなど、彼の一生も確かに無神論者の悲劇といえるものであった。エリオット氏はこの彼の無神論を重視し、彼こそは「同時代の中でももっとも思索的な、もっとも瀆神的な、したがっておそらくはもっともキリスト教的な」作家として規定してゆくのである。

『フォースタス博士の悲劇』はマーロウのそのような面を示す中心的な傑作である。版には一六〇四年版と一六一六年版があるが、この訳ではボウアズ氏編(一九三二年)のテキストに依り、一六一六年の版を採用した。マーロウのこの悲劇の典拠は英語版のファウスト物語であり、さらにその原本はドイツ語版ファウスト物語(一五八七年、フランクフルト・アム・マイン出版)であった。ヨーハン・ファウスト(一四八八年頃—一五四一年頃)は放浪の学者であり、魔法使として当時有名であった。(平井正穂)

フォースタス博士の悲劇

登場人物[1]

説明役（コーラス）
フォースタス博士
ワグナー　フォースタスの従僕。
ヴァルディーズ
コーニーリアス　フォースタスの友人。
三人の学生[2]
老人
ローマ教皇
ハンガリー国王レイモンド
ブルーノー
二人の枢機卿
リームズの大司教
ドイツ皇帝チャールズ（カロルス）
マーティーノー
フレデリック　ドイツ宮廷の廷臣。
ベンヴォリオ
サクソニー公
アンホールト公
アンホールト公爵夫人
司教、修道士、托鉢修道士、兵士、従者等。
道化
ロビン　旅館の馬丁。
ディック
酒場の主人
馬商人
御者
女将
善天使
悪天使
メフィストフィリス
ルーシファ
ベルゼバブ
悪魔たち
七大罪悪
アレクサンドロス大王
その妃
ダレイオス
ヘレン
二人のキューピッド　精霊。

第一幕

序詞（プロローグ）

説明役（コーラス）登場。

説明役　軍神（マルス）が勇猛果敢なカルタゴ軍の味方をした
トラシメヌス[3]の修羅場を馳けたり、
王威危殆に瀕するさまざまな宮廷での
恋のたわむれに酔いしれたり、
あるいはまた、傲岸不遜（ごうがんふそん）な所業のあっぱれな
さまに惚れこんだりして、
己の天来の詩声を誇示するのが私どもの詩神（ミューズ）
の意図ではありません。
ただ、みなさまに申し上げたいことは、私ど
もが今ここに演じますのは、
吉凶いずれにせよフォースタスの運命の有様（ありさま）
でございます。

---

(1) 一六一六年版に現われる登場人物。一六〇四年版のそれとは若干異なる。
(2) フォースタスの弟子格に当たるが、第五幕に登場する場合には「学者」と訳しておいた。
(3) 紀元前二一七年カルタゴ軍を率いたハンニバルがローマ軍をトラシメヌス湖畔に撃破した。

願わくはごゆるりとご観賞のほどを乞い奉ります。

さて、フォースタスの生い立ちのほどを申し上げますが、

この人物は身分の低い家柄の出で、生まれはドイツ、ローダという町、長ずるに及んでウィッテンベルヒに遊学、そこではもっぱら親戚の家で養われました。はなばなしいスコラ諸学の精華ともいえる神学の研鑽に長足の進歩を示し、まもなく博士の称号にも恵まれました。こと神学に関する聖なる諸問題につきましては、論ずるやまさに精妙、万人を凌駕するありさまでございました。

ところが、やがてうぬぼれに災いされて知識を鼻にかけ、蠟でつけた翼[1]を駆ってみずからの分際をこえて天空へと翔けましたが、その蠟も溶け、天意はついに彼の転落を断ずるにいたりました。

と申しますのは、この人物、悪魔の業に凝り、学問の輝ける賜物に食傷して、やがて呪うべき巫術にふけったからでございます。

魔術ほど彼には好ましいものはなく、ただもう根本大事な祝福よりもそれに惑溺する体たらくでした。

さて、書斎に座している男こそ当の人物という次第でございます。（退場）

第一場

フォースタスの書斎。

フォースタス、独りでいる。

フォースタス　おまえの研究題目をはっきりさせるんだな、フォースタス、そして専門の分野の蘊奥をきわめる覚悟をすることだ。

学位をえたからには、うわべは聖職者らしくするがいい、しかし、それとともにあらゆる学芸の奥義をねらい、アリストテレスの著書に生きかつ死ぬがいい。愛すべき分析学よ、おれの魂はおまえに魅せられてしまった。

「巧ミニ論ズルハ、コレ論理学ノ目的ナリ[2]」

論じ方がうまいということが、論理学の主要目的だと？

それ以上の奇蹟はこの学問にはできないというのか？

じゃあ、おれはこの勉強はやめよう、奥義はもうきわめたからな。

もっと偉大な題目がフォースタスの頭脳にはふさわしい。

「有と非有[3]」よ、さらばだ。ところでガレノスはどうか。

「科学者ノ辞スルトコロニ医者ノ任務始マル[4]」だと？

よし、フォースタス、おまえは医者になれ、そして黄金を山と積み、一世を驚倒させる診療をやって永遠の名声をえよ。

「医術ノ最高ナルモノハ健康ナリ[5]」

つまり医術の目的はおれたちの肉体の健康だというわけだ。

してみればフォースタス、おまえはその目的を達しているではないか。

おまえの日常の話が医療の虎の巻となっているではないか。

おまえの処方箋のおかげで多くの都市は悪疫を免れ、おびただしい悲惨な病疫はいやされたではないか、——

不朽の名処方箋としてそれが讃えられているのもゆえなしとはしない。

にもかかわらず、おまえは依然としてフォースタス、一介の人間にすぎない。

もし人々を永遠に生かすことができるなら、たとえ死んでも、生きかえらせることができるなら、

その時こそこの医業も高く称讃できよう。

医学よ、さらばだ！　ところでユスティニアヌスはどこにある？（読む）

「モシ一ツノ物二人ニ遺贈サレタル場合、一ハソノ物ヲトリ他ハソノ価ヲトルモノト

ス」[8]……
しみったれた遺産に関するつまらん訴訟事件だ。
「父親ハ次ノ条件ニヨル他ハソノ子ヲ廃嫡スベカラズ」……
ざっとこういったことがユスティニアヌス法典の主題だ。
法律というものの全貌なのだ。
こんな研究はただくだらない金儲けに目のくらんだ
欲の皮のつっぱったやつにこそふさわしい、
おれにはあまりに下卑て俗悪すぎる。
要するに、神学こそ最上のものだ。
フォースタス、ヒエロニュムス訳[9]の聖書をとってよっく読むのだ。(読む)
「ソレ罪ノ払ウ価ハ死ナリ」[8]、これは何たること！「罪ノ払ウ価ハ……」
罪の代償は死だというのだが、残酷な話だ。
(読む)
「モシ罪ナシトイワバ、コレ自カラ欺ケルニテ真理ワレラノ中ニナシ」[8]
つまり、自分には罪がないといえば、
われわれは自分を欺き、みずからの中に真理をもたないことになる。
ということは、おそらく、われわれは罪を犯さざるをえないし、
したがってその結果死ななければならないということだ。
つまりは永遠の死をとげざるをえない。
いったいこれを、この「ケ・セラ・セラ」を、なるようにしかならんというこの教義を何とよべばよいのか。神学よ、さらばだ！
魔術家の摩訶不思議の術こそ、
この魔法の書こそ神々しいといわなければならぬ。
いろいろな線、円、文字、記号、
これこそフォースタスの垂涎おく能わざるところのもの。
おお、なんという利益と悦楽が、
いや権力が、名誉が、全能が、
この道に精進する者に約束されていることか。
地球の静止している両極の間にあって動く一切は
ことごとくおれの意のままになる。皇帝も、王者も、
その威令が風靡しているのは要するにその領土内に限られており、
風を呼び、雲を裂くなど思いもよるまい。
だがこの術に長じた者の支配は
人の心の及ぶ限り果しなく拡がってゆく。
魔術の達人はいわば神に近い。
そうだ、神になるために、おれはこの書を懸命に学ぼう。
(ワグナー登場)
おい、ワグナー、わたしの仲のよい友人、
ドイツ人ヴァルディーズとコーニーリアス[10]の両君に丁寧に挨拶して、
どうか家に来てくれるようにとお願いしてくれ。
ワグナー　かしこまりました。(退場)
フォースタス　いくら一人であくせくと努力してみても、
あの二人からえられる耳学問にはかなわないからな。
(善天使と悪天使、登場)
善天使　フォースタス、その呪われた書物を捨てて、
二度とのぞいてはいけない、でないとおまえの魂は惑わされ、

(1) ギリシア神話のイカルスの故事を暗示している。
(2) 片仮名で訳した部分の原文はラテン語、以下これに倣う。この引用文はフランスの人文学者ペトルス・ラムスの『弁証論』中の一節。
(3) ギリシアの医学者・哲学者（一二九頃―一九九）で、西洋医学の祖といわれる。
(4) アリストテレスの『感覚と感性について』中の一節から。ただし多少文句が変わっている。
(5) アリストテレスの『ニコマコス倫理学』より。
(6) ユスティニアヌス帝（五二七―六五）の『ローマ法全書』より。
(7) 主としてラテン教父ヒエロニュムス（三四八頃―四二〇）によって完成されたラテン語訳聖書、いわゆる『ウルガタ』をさす。
(8) 「ローマ書」第六章二三節。
(9) 「ヨハネ第一の書」第一章八節。
(10) フォースタス（ファウスト）の周辺にヴァルディーズという人物は存在しなかったが、コーニーリアスを偲ばせるコルネリウス・アグリッパ・フォン・ネッテスハイムという魔法使がいたといわれる。

神の烈しい怒りを頭上に招くことになる。
ひたすら聖書を読むのだ。おまえの手にしている書は瀆神の書だぞ。
悪天使　ひるむな、フォースタス、光輝にみちた魔術に精進するのだ、
この術の中には自然のすべての宝がかくされている。
天上の神のように地上にあって
地水火風の四大元の支配者となるのだ。
（両天使退場）
フォースタス　四大元を支配できると思っただけで心はもういっぱいだ！
精霊どもにおれの好きなものを運ばせたり、
あらゆる曖昧な問題を解かせたり、
気随気儘に途方もない企てをやらせてみるとするか。
そうだ、おれは精霊どもをインド[3]に飛ばして
黄金をさがさせ、
大洋の底に潜って輝ける真珠を求めさせ、
新発見のアメリカ大陸をくまなくさぐっては
舌もとろける果物、はては王者にふさわしい
佳肴をもってこさせよう。
不思議な哲学の解説を命じもしようし、
すべての異邦の王者どもの機密をも告げさせよう。
ドイツ全土を黄銅の壁でかこみ、
ラインの急な流れを美しいウィッテンベルヒの周辺にめぐらさせよう。
大学の教室には高価な絹布をもってみたし、
学徒の装いも豪華絢爛たるものにさせるとしよう。
また精霊どもに金貨をもってこさせ、兵隊をつのり、
わが国土からパルマ公[2]を追放し、
全地域の唯一人の王者として君臨してみたい。
そうだ、かつてアントワープの橋[3]を爆破したあの火船よりさらに巧妙な武器をおれに隷属するあいつらに作らせてもみたい。（奥に向かって呼びかける）
（ヴァルディーズとコーニーリアス登場）
やあ、よく来てくれた、ヴァルディーズ君も、コーニーリアス君も。
ひとつきみたちの高邁な話でわたしを啓発してもらいたい。
親愛なるヴァルディーズ君、コーニーリアス君、
きみたちの説得にかぶとをぬいでわたしもついに
魔術や秘法をおこなってみることにした。
といってもきみたちの説得だけではなく、
まともな学問にあきたりない、わたしの奔放な心のせいでもある。
なにしろ、わたしの頭は妖術のことで夜も日も明けないという始末なのだ。
哲学は鼻もちならぬし曖昧だし、
法律と医学は知能の低い連中にこそふさわしい。
神学ときたらこれらの中で最低で、
不快でもあり気持も悪くみじめで悪質だ。
ところが、魔術、そうだ、魔術こそわたしの心を魅了したものなのだ。
だから友情あつい諸君にわたしの企てに賛同願って援助を賜わりたい。
三段論法に巧みなわたしがドイツ教会の牧師どもをてこずらせたことも、
かつて歌の巧みなムサイオスが地獄に下ったさい、
多くの亡霊が蝟集したようにウィッテンベルヒの若者どもを
わが講筵に集めたことも、諸君は知っているはず、
亡霊を呼び集めて全ヨーロッパの称讃を博したあのアグリッパ[4]にも劣らぬ術者にわたしはなりたいのだ。
ヴァルディーズ　フォースタス君、この魔法の書、きみの智能、われわれの経験、
これがあればわれわれが世界じゅうの衆望をえて聖徒の位につくこともできる。
アメリカのインディアンがスペイン人の主に隷従しているように
あらゆる四元を司どる精霊に命じて
われわれ三人に日夜分たず仕えしめよう。
時に応じては、獅子さながらにわれわれの護衛に当たらせ、
また白刃の槍をかざしたドイツ槍騎兵よろしく、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるいはラプランドの巨人[1]よろしく、われわれのかたわらを馳けて守らせよう。
時には恋の女王ヴィーナスの白い乳房より一段ときわだった美しさをその霊妙な面にたたえた
年増女、おぼこ娘よろしくわれわれにかしずかせよう。
ヴェニスからは巨大な商船隊を回航させ、
アメリカからはスペイン老王フィリプの財庫を年ごとにみたす
あの黄金の羊毛をもってこさせよう。
もちろん、博学なフォースタス君の決意が不動のものであればの話だ。

フォースタス　このことに関してわたしの決意が堅いのは、ヴァルディーズ君、きみの生命への執着にも劣らない。だからその点は信じてもらいたい。

コーニーリアス　魔術のおこなう奇蹟をみればもう他に何も学ぶつもりはないときみも誓わないではおれまい。
占星の学を修め、
ラテンその他の諸国語に通じ、鉱物学にくわしい人は、
魔術に必要な基礎知識をすべて備えた人だ。
したがって、フォースタス君、きみが名声を馳せ、
かつてデルポスの神託を聞こうと集まった人人以上に
多数の者がきみの不思議を見ようとおし寄せることは疑いない。
精霊がわたしに語ったところによれば、彼らは海洋を干し、
難破した異邦の船の宝物をもたらすどころか、
この地球の巨大な内部に
われわれの祖先が隠した全財宝をもたらすことができるという。
してみれば、フォースタス君、われわれ三人は将来欲しいものは何でも手に入るわけだ。

フォースタス　そうだ、何でも手に入る、コーニーリアス君。聞いただけでもなんとすばらしいことか！
さあ、何か魔法を実際にやってみせてはくれまいか、
どこか木立のかげで自分でも呪文をのべて、
精霊を呼びだし、思う存分その楽しみに耽りたいのだ。

ヴァルディーズ　よろしい、早速どこか寂しい木かげに
ベイコンとアルベルトゥス[6]の著作と、
ヘブライ原典の詩篇と新約聖書[7]を携えてゆくがよい。
その他の必要なことがらについては、
この相談が終わらないうちに、教えてあげよう。

コーニーリアス　ヴァルディーズ、初めに呪文の言葉を教えるがよい、
それから他の仕来りを教えれば
フォースタスは独りで魔術をかけることができよう。

ヴァルディーズ　まずきみに基本を教えてあげよう、
そうすれば、わたしよりもはるかにすぐれた術者になれるだろう。

フォースタス　では食事をともにしていただこう、そのあとで、
魔法のあらゆる奥義について教示を願うとしよう。
今夜床につく前に自分の力をためしてみたい。
そのためにたとえ死んでも、精霊を呼びだしてみたいのだ。

（一同退場）

---

(1) 西インド諸島をいう。
(2) パルマ公はスペイン政府の総督としてネーデルランド地方を一五七九年より一五九二年まで支配していた。
(3) パルマ公がアントワープ閉鎖のために架した橋を一五八五年四月、アントワープの住民は爆薬を仕掛けた船で爆破した。
(4) 前記のコルネリウス・アグリッパのこと。
(5) 北欧のラプランド地方の住民はラップ族で体格は矮小であるが、当時は巨人族と誤って考えられていたらしい。
(6) ロウジャ・ベイコン（一二一四頃―一九四）はイギリスの、アルベルトゥス・マグヌス（一一九三頃―一二八〇）はドイツの、自然科学者であったが、当時魔法使との噂が高かった。
(7) とくに「詩篇」の第一二、第五一の両篇、「ヨハネ伝福音書」最初の数節、などは呪文を唱える際に誦されたそうである。

第二場

フォースタスの家の前。
二人の学生登場。

第一の学生　「カク我証明ス」[3]云々でわれわれの学園をうならしたフォースタスはその後いったいどうしたんだろうか。

（ワグナー登場）

第二の学生　それはすぐにわかるさ。ほらここに彼の従者がきたからな。

第一の学生　おい、きみ！　きみのご主人はどこなんだ。

ワグナー　天におられる神様がご存知で。

第二の学生　というと、きみは知らんというのだな。

ワグナー　いや知ってますよ。神様がご存知だからといって、あたしが知らんという論理は出て来ないでしょうがな。

第一の学生　なんだと！　この野郎。冗談もいいかげんにしてフォースタスがどこにいるか教えろよ。

ワグナー　論理からいってもそういう話は筋はとおりませんね、学者の卵ともあろう方のおっしゃることとも思えませんな。ですから、誤りは誤りと認めて、これからは気をつけることですよ。

第二の学生　というとつまりぼくたちには教えないというわけか。

ワグナー　そうらまた早合点だ。ちゃんと教えますよ。ですがね、あんた方が鈍才でもなければ、あんな質問はなさらんでしょうな。うちの旦那は「自然的人間（コルプス・ナチュラレ）」[2]じゃないですかね、ということは「動く（モビル）」人間ということじゃないですか。とすると、どうしてあんた方はああいう質問をするのかね。あたしが生れつき鈍重でなかなか腹もたてず、それに少し助平（いや恋を知る男）だからいいようなものの、そうでもなかったら、あんた方、旦那が肉をぶった切って口の中にほうりこんでいなさる部屋の近くをうろちょろすると危いですぞ。もっとも、次の裁判の節にゃお二人ともしばり首になるのはきまっとりますがね。ざっとこんな工合にやっつけといてと、……こんどは清教徒よろしく厳粛な顔をして、開口一番、こんなふうにきり出しますかね。――まことに、わが同信の兄弟に告ぐる次第じゃが、わが主（あるじ）はヴァルディーズ氏とコーニーリアス氏とともどもただいま食事を召し上がっておられる最中でござっての、このぶどう酒にものをいう口あらば敬愛する諸兄にそのことを告げるは必定。では、さらばじゃ。願わくば主が汝らを祝し、汝らをたもち、汝らをすこやかならしめ給わんことを。（退場）

第一の学生　おお、フォースタスよ、やっぱりぼくが心配していたとおりだったのか、あなたはついに呪うべき魔法のとりこになってしまったのか、あの二人は魔法にかけては世にも恐ろしい人物なのだが。

第二の学生　フォースタスがぼくに関係のない他人だとしてもその魂に迫る危険を黙ってみているわけにいかない。さあ、早速学長のところへいって事の仔細を告げよう、もしかすると学長の説諭を聞いて彼も思いなおすかもしれない。

第一の学生　いまさら何をいっても手遅れだよ、思いなおすものか！

第二の学生　それでも、できるだけのことはやってみようじゃないか。

（両人退場）

第三場

森（こだま）の中。
呪いをおこなおうとフォースタス登場。

フォースタス　夜の暗い蔭が今こうやって
オリオン星座の寒々と濡れた顔をみようと
南極の世界から天空に翔け上り
まっ黒な息を吐きちらしながら空一面を暗澹
とおおっている。
さあフォースタス、おまえの呪文をはじめて
みるがいい、

すでに祈りもし犠牲もささげたのだから、
はたして悪魔たちがおまえの命令をきくかどうかやってみるんだ。
この円周の中にはエホバの名が書かれている、綴りを前後に綴り変えたやつだ。
そのほか聖徒たちの略名だとか
大空にちりばめられたすべての星辰のしるし
　や
十二宮の星座、かずかずの遊星の符号も書いてある。
つまり、精霊を否応なしに呼びだす手だてなのだ。
だから、フォースタス、怖れることなく断固としておこない、
魔術のなしうる一切をこころみるがいい。

（雷鳴）

「黄泉ノ神々ヨ、我ニ祝福ヲ垂レ給エ。三位一体ノ神エホバヨ、立チ去リ給エ。火ト風ト水ト土ノ霊ヨ、我汝ラニ敬意ヲ表ス。東方ノ主神（ルーシファ）ヨ、燃エサカル地獄ノ王ナルベルゼバブヨ、デモゴーゴンヨ、願ワクハ我ラノ乞イヲイレ、メフィストフィリスヲシテ現ワシメ給エ。（二階舞台に竜、姿を現わす）何故ニ汝タメラウヤ。エホバト地獄ト我ガ今注グ聖ナル水ニカケ、我ガ今キル十字架ニカケ、マタ我ラノ誓イニカケテイウ、メフィストフィリスヨ、我ラノ召シニ応ジテ直チニ現ワレ出デヨ！」

（メフィストフィリス登場）

おれの命令だ、出直してこい、姿を変えてこい、
そんな恐ろしい姿でおれにかしずくのはまっぴらだ。
出直して年とったフランシスコ修道士に化けてこい、
聖職者の姿が悪魔にはいちばん似合うからな。

（メフィストフィリス退場）

なるほどおれの気高い言葉には偉力があるらしい、
魔術が上手だってことはまったくこたえられんことだ。
それにしてもこのメフィストフィリスというやつは素直で、おそろしく謙遜で鞠躬如としているやつだ。
魔法とおれの呪文の偉力がこんなだとは驚いたな。
こうなれば、おれも立派な桂冠魔術使というわけだ、
なにしろあの大メフィストフィリスを使いこなせるのだから。

「ヨキカナ、修道士ノ姿ナルメフィストフィリスヲ駆使スルトハ！」

（フランシスコ修道士に扮したメフィストフィリス再び登場）

メフィストフィリス　フォースタス、おまえは
わたしに何をやってもらいたいのか。

フォースタス　おれが生きている間おれにつき従い、
おれのいう一切をおこなうことを命ずる、
たとえそれが月を九天の高さより落し、
大洋を溢れさせて世界を没させることであろうともだ。

メフィストフィリス　わたしは偉大なルーシファの一介の配下にすぎず、
許しがなければおまえに従うことはできない。
彼が命ずること以外、われわれは何ごともなしえない。

フォースタス　おれのところにおまえが現われたのも彼の命令ではなかったのか。

メフィストフィリス　そうではない。わたしは自分でやってきたのだ。

フォースタス　おれの呪文でおまえは呼び出されたのではなかったのか。どうなのだ？

メフィストフィリス　それが原因ではあったが、要するに「偶然による」のだ。
われわれは誰かが神の名をもてあそんだり、聖書や救主キリストを冒瀆するのをきけば、そいつの気高い魂が手に入ると思い飛んでゆく。

---

(1) 「カク我証明ス」という言葉はスコラ哲学で常用されていた用語。

(2) 「自然の、つまり、動きうる物体」云々という表現もやはりスコラ哲学の常套語であった。

(3) ローマの詩人スタティウスの『デバイス』の註解に最初に言及され、その後中世を通じ魔神の一人として恐れられていた。

(4) スコラ哲学の用語。「ベル・セ」（自己自身による）に対立する意味で、他に依存する偶有性を強調する。

そいつがわれとみずからを地獄におとすような
行為をしない限り、われわれはそこへゆくわけはない。
だから悪魔を呼び出す一番の近道は
父と子と聖霊の三位一体を仮借なく罵り
地獄の王者にうやうやしく祈りをささげることだ。

フォースタス　そうフォースタスはやったのだ。
もうすでにやったのだ。そしてただ、
ベルゼバブの他に仕える主はないと信じている。

フォースタスはこの主に忠誠を誓っている。
「呪い」という言葉にすくみ上がるおれではない、
おれにとっては地獄は極楽であり、極楽は地獄なのだからな。
わが霊よ、古の哲学者とともにあれだ。[3]
ところで、人間の魂などというこういうくだらないことはさておいて、
おまえの主のルーシファとはいったい何ものなのだ。

メフィストフィリス　あらゆる精霊の支配者にして指揮者。

フォースタス　そのルーシファはかつては天使ではなかったのか。

メフィストフィリス　そうだ、天使だったのだ、
しかも神にもっとも愛された天使だった。

フォースタス　それが悪魔どもの王者となったいわれは何か。

メフィストフィリス　野望にみちた傲慢と不遜のためだった。
そのため神の怒りを招き九天の高さから転落したのだ。

フォースタス　では、そのルーシファに仕えているおまえたちは何ものだ。

メフィストフィリス　ルーシファとともに地獄に堕ち、
ルーシファとともに神に反逆をたくらみ、
ルーシファとともに永劫に呪われている不幸な霊。

フォースタス　呪われている場所は？

メフィストフィリス　地獄の中。

フォースタス　そのおまえが地獄を抜け出しているいわれは？

メフィストフィリス　ここが地獄なのだ、どうしてわたしが地獄から抜け出せよう。
かつて神の御顔を仰ぎ、
天上の永遠の喜びを味わったわたしが
永劫不滅の祝福を剝奪された現在、
無限地獄の責め苦から脱れうるとおまえは思うのか。

おお、フォースタス、こんなくだらない質問はやめてくれ、
わたしの弱々しい魂が怖ろしさで慄え上がるのだ！

フォースタス　何だと？　メフィストフィリス
ともあろう者が
天上の喜びを失ったために嘆き悲しんでいるのか。
おまえはこのフォースタスから不屈不撓の精神を学ぶがいい、
二度と味わえぬ天上の喜びなどは一笑に付すがいい。
ルーシファのところへいって一部始終を伝えてもらいたい。
神にむかって不逞な思いをいだいたため
フォースタスも永劫の死を招くにいたった以上、
もし借すに二十有余年の歳月をもってし、
あらゆる官能の欲に浸ることをゆるされるならば、
おれの魂をルーシファに差し上げる、と、こういってくれ。
それも、たえずおまえがおれに仕えていて、
おれの欲しがるものは何でもくれ、
おれの訊ねることには何でも答え、
おれの仇敵を殺し、おれの味方を助け、
いつもおれのいいなりになってくれるならば、という条件つきだ。
さ、地獄の王ルーシファのところへもどってくれ、
そして真夜中、おれの書斎に会いにきてくれ、
そのさい、おまえの主の意向をきかせてもらいたい。

メフィストフィリス　よし、承知した。（退場）

フォースタス　おれに大空の星の数にも等しい

魂があったとしても
メフィストフィリスを手に入れるためならな
　げ出してもよい。
あいつの力をかりておれは世界を支配する皇
　帝となり、
大空をよぎる橋をかけ
軍勢をひきつれて大洋をわたってやる。
アフリカの沿岸をめぐる山脈を結び
あの地方をスペインの陸続きにし、
これら二国をしておれに貢ぎ物を献ぜしめて
　やる。
ドイツの諸侯は一人残らず、
いやドイツ皇帝もおれの許可なくしては生か
　してはおくまい。
欲しいものが手に入ったからには
おれはひたすら魔術の研鑽にふけるとしよう、
やがてはメフィストフィリスも戻ってこよう。
（退場）

第四場

（ウィッテンベルヒ近くの森の中か）
ワグナーと道化登場。

ワグナー　おい、小僧、こっちへ来い。
道化　小僧だと！　おれの図体にけちをつけや
がったな。畜生め、おまえさんの前にたって
るおれが小僧だと！　ひげを生やした小僧を
さぞたくさんごらんなすったろうね、まった
くの話。
ワグナー　おい、懐にゃ鐚一文入らないのか。
道化　入るものも入るが、出るものも出てまさ
　あ、ほらごらんのとおり。
ワグナー　可哀そうに。素寒貧だか素裸だかし
らないが妙な洒落をいってやがる。てっきり
こいつは仕事にあぶれて腹をへらしてるな。
これじゃ血のしたたってる生まの羊の肩肉を
くれるといったら、おのれの魂くらい平気で
悪魔に売り渡そうって手合いだな。
道化　冗談じゃない、どっちもまっぴらでさ。
そんなべらぼうな値段を払ったからにゃ、肉
はよっく焙って、それに上等なソースをつけ
てもらわなくっちゃ引き合わねえな。
ワグナー　どうだ、ひとつおれに奉公してみな
いか。奉公してくれたら、例の「我ガ弟子[2]」
よろしく扱ってやるがね。
道化　なんだって？　詩よろしくだって？
ワグナー　そうじゃない、刺繍のついた絹物を
着せて「ひえん草」の粉をかけて、ってこと
さ。
道化　ひえん草だって！　ていうと、虱退治に
よくきくやつだ。ていうと、つまり、おれが
おまえさんに奉公すると虱だらけになるって
ことだね。
ワグナー　おれに奉公しようとしまいと、どっ
ちみちおまえは虱にたかられるのさ。という
わけはだな、もしおまえが七年間おれに奉公
するとこの場で約束してくれればよし、さも
なければおまえにたかっている虱を一匹残ら
ず疫鬼に変えておまえの体を喰いつぶさせて
やるからな。
道化　じつはそんなお手数かける必要は全然な
いんで。なにせ、虱の連中ときたらもうとっ
くにおれとは親しいつき合いなんでね。喰い
ぶちを払ってるみたいな大きな面をしてやが
ってね。
ワグナー　つべこべ冗談いわんでこの銀貨をと
っとけ。
道化　いただきやしょう。どうもありがとうさ
んで。
ワグナー　よし、よし。ところで、あと一時間
たったら、いつだかどこへだかわからんが悪
魔がおまえを連れにくるからな、よっく覚悟
しとけ。
道化　ほれ、このとおり、銀貨は返す。そんな
ものは一文だっていらん。
ワグナー　おれだってそんなものいらん。おま
えは手付金とって奉公の約束をしたんだぞ。
じつはな、おまえをつれていくように早速お
れは悪魔を呼び出すつもりなのさ。おうい、
バニオウ！　ベルチャー！
道化　ベルチャーだって！　ベルチャーめ、こ
こへやって来てみろ、おれが吹き飛ばしてや
るから。悪魔なんぞこわくはないぞ。

（1）「プラトンとともに呪われる」という諺があった。
（2）人文学者ウイリャム・リリ（一四六八頃―一五二二）のラテン詩の冒頭の一句。

（二人の悪魔登場）

ワグナー　さあ、どうだな、こうなればおまえもおれに奉公するだろうな。

道化　するどころじゃねえワグナーの旦那。奉公するから悪魔をおっぱらってくださいよう。

ワグナー　精霊ども、退散しろ！　さ、おまえはおれのあとからついて来るんだ。

（悪魔たち退場）

道化　ついて行きますよ。ですがね、旦那、この悪魔を呼びだす商法をおれに教えておくんなさいよ。

ワグナー　ああ、いいとも。おまえが犬でも、猫でも、二十日鼠でも、大鼠でも、そのほかなんにでも姿を変えられるような術を教えてやるよ。

道化　犬でも猫でも二十日鼠でも大鼠にでもなれるんだって？　いや、さすがはワグナーだ！

ワグナー　馬鹿野郎、おれのことはワグナー先生って呼ぶんだ。それから注意しとくが、用心深く歩くように気をつけてな、そして、おまえの右の眼でちゃんと直線的におれの右のかかとを見てるんだぞ。「我ガ足跡ヲ踏ムガ如クニ」

道化　ええ、ちゃんとおっしゃるとおりにしますよ。

（両人退場）

第二幕

第一場

フォースタスの書斎。

フォースタス登場。

フォースタス　こうなったからには、フォースタス、

おまえは否応なしに地獄に堕ちなければならぬ。もう救われる見込みはない。

してみれば、神や天国のことを考えて何になる。

くだらない妄想はかなぐり捨て、望みを断つのだ。

神に望みをかけるな、ベルゼバブを信頼しろ。いまさらあと戻りはよせ。フォースタス、磐石の決意を固めろ。

何をためらっている？　ああ、おれの耳もとで何かがささやく。

「この魔術を棄てて神にたち帰れ！」と。

そうだ、フォースタスはもう一度神にたち帰ろう。

神にだと？　だが、神はおまえを愛してはいない。

おまえの仕えている神はおまえ自身の情欲にすぎず、

ベルゼバブを愛するいわれもそこにある。

この魔神のためにおれは祭壇と寺院をきずき、生まれたての嬰児のなま温かい血潮を献げよう。

（二人の天使登場）

悪天使　フォースタス、あの誉れ高い魔術に一路精進するのだ。

善天使　愛すべきフォースタスよ、呪うべき魔術を捨てるのだ。

フォースタス　悔い改めや祈りや悔悟が、いったい何になるというのか。

善天使　おまえを天国に導くためになるのだ。

悪天使　いや、妄想なのだ、狂気の沙汰なのだ、そんなものに耽る人間は結局馬鹿をみるのだ。

善天使　愛すべきフォースタス、天国とその栄光を思え。

悪天使　よせ、フォースタス、名誉と富を思うのだ。

（両天使退場）

フォースタス　富だと！　よし、それじゃエムデン侯の領土をおれのものとしてやる。

メフィストフィリスがおれの味方である限りどんな力もおれに害を加えることはできん。

おれは安全なのだ。

いろいろ疑うことはもうやめよう。おい、メフィストフィリス、出てきてくれ。

ルーシファからの福音をもってこい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com